

くす通信

第116号
2010年9月1日

国立病院機構 熊本医療センター発行

しきゅうけいがん

子宮頸癌と HPV ワクチンについて



ヒガンバナ
(彼岸花)

目：ユリ目 Liliales
科：ヒガンバナ科 Amaryllidaceae
属：ヒガンバナ属 Lycoris
種：ヒガンバナ L. radiata

「くす (樟)」の由来について

くす (樟) は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし (薬師) とは、医師のことを指し、くすしぶみ (薬師書) は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

HPV ワクチンについて

薬剤師 蔵野 美紀子

ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチンはすでに 100 カ国以上で使用されています。国内では 2009 年 12 月からサーバリックス® (Cervarix®) という子宮頸癌 (しきゅうけいがん) 予防ワクチンが使用できるようになりました。

ワクチンは、病気の原因となる細菌やウイルスの働きを弱めたりして、体にいれておくことで、病気にかからないようにするものです。ウイルスが体に入ってくると、ウイルスを攻撃する物質 (抗体) ができます。しかし抗体ができるまでに時間がかかってしまうため、あらかじめワクチンを接種し抗体をつくっておくことでウイルスが入ってきたときにすぐに攻撃することができます。また、この HPV ワクチンに含まれるウイルスには中身 (遺伝子) がないので、接種しても感染することはありません。



サーバリックス® (Cervarix®)

子宮頸癌予防ワクチンは、HPV のなかでも特に子宮頸癌の原因となりやすい HPV16 型と HPV18 型のウイルスに対する抗体をつくらせるワクチンです。HPV の中でも、発がん性があり、悪化するスピードがはやい HPV16 型と 18 型の感染予防は、子宮頸癌の発症を予防するばかりでなく、急激に進行する子宮頸癌を予防するという面でも意味があります。

ワクチンは、1~2 回の接種では十分な効果がでないため、肩に近い腕 (上腕三角筋) の筋肉内に半年の間に 3 回接種する必要があります。初回接種から 1 か月後、半年後に再度接種します。ワクチン接種後、現在 6.4 年以上有効なことがわかっています。また、これまでの研究により接種後 20 年間は効果が続くと考えられています。

他のワクチンを接種する場合は、間隔をあける必要があるため確認が必要です。(生ワクチン製剤 (麻疹・風疹・水痘など) であれば 27 日以上、不活化ワクチン (インフルエンザワクチンなど) であれば 6 日以上。) ワクチン接種後にあらわれることがある症状として (注射した部位のかゆみ、腫れ、痛み) (発疹、じんましん) (吐き気、下痢、腹痛) などがあります。症状としてはあまり重くないため、注射を途中でやめることはあまりありません。まれに、重い症状 (失神、血管浮腫、呼吸困難など) があらわれることもあるため、ワクチン接種後、気になる症状があればすぐに申し出てください。

注射した部位のかゆみなどの症状は、ウイルスから体をまもろうとするはたらきでおこりますが、だいたい数日でよくなります。

ワクチンをうったからといって、すべての HPV による感染を予防できるわけではありません。また、ワクチンは、ウイルスをころすわけではないため、すでに HPV に感染していた場合はききめがありません。感染する前に、ワクチン接種を行って HPV 感染を防ぐことで子宮頸癌の発症を予防できます。また、ワクチン接種は子宮頸癌検診の代わりにはならないため、ワクチン接種とともに、定期的に子宮頸癌検診を受けることが大切です。

診療科

- 総合医療センター 総合診療科、血液内科、呼吸器内科、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科
- 消化器病センター 消化器内科
- 心臓血管センター 循環器内科、心臓血管外科、
- 脳神経センター 脳神経外科、神経内科、
- 感覚器センター 眼科、耳鼻いんこう科、皮膚科、
- 画像診断・治療センター 放射線科、
- 救命救急センター 救急科
- 精神神経科、 ■ 小児科 ■ 外科 ■ 整形外科
- リハビリテーション科 ■ 泌尿器科 ■ 産婦人科
- 歯科口腔外科 ■ 形成外科 ■ 麻酔科 ■ 病理診断科



当院産婦人科は、主に婦人科腫瘍の診断、治療を行っています。

子宮頸部上皮内癌を始めとする子宮頸癌、最近増加傾向にある子宮体癌、卵巣癌等婦人科悪性腫瘍の症例数は熊本県内はもとより、九州圏内でも有数であり、県内全域より紹介患者様を受け付けて、その治療にあたっております。

また、治療後の経過観察等は地域への逆紹介を推進しており、遠方より来院された患者様にも安心して治療ができるように取り組んでいます。

救急患者様に対しては、24時間体制で対処しており、産科疾患（新生児は除く）、一般産婦人科疾患も治療可能です。

しきゅうけいがん 子宮頸癌と HPVワクチン について



産婦人科医長
西村 弘

子宮頸癌の原因が、ヒトパピローマウイルス (human papillomavirus : HPV) であり、これらのウイルスが長期感染することによって子宮頸癌が発生することが最近わかってきました。HPVには現在90種類以上の型が分類されており、良性のいぼの原因となるもの(1, 2型)、粘膜に感染して尖圭コンジローマ(外陰部のいぼ)になるもの(6, 11型)や子宮頸癌の原因となるもの(16, 18, 31, 33, 52, 58型)があります。

これらのウイルスは性交渉によって伝播されますが、いわゆる性病ではなく、20代の女性では不顕性感染(症状がほとんどないもの)がほとんどで、一過性のものです。日本での報告では、10代の女性で36%、20代では26%の女性にHPVが検出されており、約1,200万人の女性がHPVキャリアー(不顕性感染者)と推定されています。これらのキャリアーのうち、ごく一部の人が子宮頸癌を発症していきます。癌への進行の詳細は不明ではあるものの、このウイルスの感染が子宮頸癌発症の原因であることは間違いないと考えられています。

HPVワクチンは、感染性のないウイルス粒子を抗原として投与し、抗体を発現させて本物のウ

イルスの感染を予防する薬剤です。現在日本で認可されているワクチンは2価(16, 18型用)ですが、これで90%以上の前癌病変の発症予防が可能です。

日本では、高校生になると性交経験率が20%以上になるため、性交経験者が増加する中学生までにHPVワクチンを接種することが推奨されるため、11-14歳の女兒が第一の接種対象者です。また、15歳以上の女性であっても、まだ未感染の女性や感染は受けたものの大部分の女性は自分の細胞性免疫でウイルスを排除しているため、再感染の予防に効果があり、15歳から45歳の女性も第二の接種対象者です。

欧米(スウェーデンやフランス)等では、HPVワクチンをすべて公費負担(無料)で接種するところもありますが、日本では自治体によりまちまちです。自己負担(1回12,000円、3回必要)なのか、どこまで公費で可能なのかは、県庁のホームページの健康ナビや、各市町村の健診課に問い合わせればわかります。また、受診したい医療機関でHPVワクチンの接種が可能かどうかを確認することが必要となります。

国立病院機構 熊本医療センター

- 🕒 診療時間 8:30 ~ 17:00
- 🕒 受付時間 8:15 ~ 11:00
- 🕒 休診日 土・日曜日および祝日

急患はいつでも受け付けます

〒860-0008 熊本市二の丸1-5
TEL 096 (353) 6501 (代表)
FAX 096 (325) 2519
HP <http://www.nho-kumamoto.jp/>